令和７年度北九州市総合教育会議 会議録

１ 日時

令和7年１２月１６日（火） １３：３０～１５：００

２ 場所

ホテルクラウンパレス小倉 ２階 香梅 （北九州市小倉北区馬借１-２-１）

３ 出席者

市 長 部 局：武内市長、大庭副市長
教育委員会：太田教育長、大坪委員、郷田委員、香月委員、中島委員、清成委員
司　　会：下野総合教育会議調整担当課長

４ 議事録

武内市長
本日は皆様、北九州市総合教育会議にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。教育長、教育委員の皆様におかれましては、北九州市の未来を担う子どもたちの教育に平素から大変お力を賜りまして、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。子どもを取り巻く、あるいは教育を取り巻く環境というのは今大きく変わっております。そうした中で、未来に向かってしっかりと北九州市の子どもたちが、そして教育がどのように発展していくのか、その羅針盤になるような議論を皆さんとさせていただければと思いますので、よろしくお願い申し上げたいと思います。 その中でも今日は、お話しさせていただきましたが「新たな時代の教育デザインの構築」、「子どもの読書活動推進」ということが重要なテーマとなるということで議題になっております。今日はこうしたテーマを含めて、皆様の忌憚ないご意見を賜りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
司会
武内市長、ありがとうございました。 続きまして、太田教育長からご挨拶いただきます。よろしくお願いします。
太田教育長
どうも皆さんこんにちは。教育委員会を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。武内市長におかれましては、日頃より北九州市の教育環境の充実に本当に汗を流していただき、知恵を絞っていただき、さらに私どもと一緒に歩んでいただいていることに心より感謝申し上げます。 現在、教育委員会では、教育大綱の実行計画として令和６年度に策定いたしました「こどもまんなか教育プラン」に基づいた施策を展開しております。また、国では次期学習指導要領の議論が進められておりまして、学校教育は大きな転換点を迎えているところです。教育委員会としましては、学校現場では様々な課題を抱えておりますけれども、一つ一つ丁寧に対応しながら、新しい動きにもいち早く、そして長期的な視点を持って対応していく必要があると考え

ております。本日の会議を通じまして、本市教育が今後目指すべき方向性を武内市長と共有し、さらなる充実に努めてまいりたいと考えております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【協議１】新たな時代の教育デザインの構築について

総務部長

資料１の１ページをご覧ください。まずはじめに、教育委員会として目指していく「新たな学びの方向性について」ご説明させていただきます。

はじめに、現在、そして未来の子どもたちが、将来どのような時代を生きるのかということを考えることが必要となってまいります。今後、より予測困難で「正解のない」時代が到来すると言われております。生成 AI に代表される革新的な技術の登場や、価値観の多様化が急速に進んでまいります。特に、近年、急速に普及し、性能も向上している生成 AI は、今後、雇用にも影響を及ぼすことが指摘されております。このように、不確実性の高い時代を生きる子どもたちは、生涯にわたり学び続け、自ら「問い」を立て、他者と協働しながら解決策を見出していくことが必要となってまいります。

２ページをお願いいたします。次に、ミクロな視点から見ますと、支援を要する子どもの増加に象徴されるように、ひとつの教室内における子どもたちの多様性は以前よりも増してきております。こうした多様な子どもたちが、それぞれの得意や才能を伸ばし、互いを理解・尊重し、学び合う姿勢が重要となってまいります。

３ページをご覧ください。これらのことを踏まえまして、これからの学校における学びについて、１０月の定例会見でも市長からご発表いただいたところでございますけれども、「１人１人を大切にする学力向上」をテーマといたしまして、１つ目として「AI＋読書」、それから２つ目に「体験機会の強化」、３つ目に「脱・暗記重視」の３つのアプローチを掲げたところでございます。これらのアプローチを通じて実現していきたい学びの姿、育んでいきたい力を説明いたします。スライドの下側のとおり、学習の形態といたしまして、個別最適な学びと協働的な学びの２つを充実させてまいります。個別最適な学びでは、AI ドリルの活用など、子ども１人ひとりに合わせたオーダーメイドの学びを推進してまいります。協働的な学びでは、他者との協力を通じて答えを創り出す学びを広く経験できるようにしてまいります。その際には、教室では得られない実地の経験を行う体験活動や、「脱・暗記重視」の探究的な学習の機会を設けることが重要となってまいります。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現を目指します。そのためには、授業改善も必須となってまいります。その上で、学力の向上を実現してまいります。「学力」は「知識・技能」だけではなく、「資質・能力の３つの柱」の総合的な育成や向上を目指します。また、学習の基盤となる言語能力も重要となってまいります。これは、読解力や論理的に考え、言語化する能力であり、学習の基本であるとともに、AI を使いこなす上でも求められる力となってまいります。AI 時代だからこそ言語能力がより必要となることから、それを養う「読書」も推進してまいります。こうしたことを踏まえ「『正解のない時代』を生きる力の涵養」を目指してまいります。変化の激しい未来の社会では、「自分で問いを見つけ、解決する」姿勢や、表面的な知識のみならず、「学ぶ意味や目的を知り、楽しむ」ことが、大変重要となります。また、本来持っている可能性を発揮し、自らの人生を舵取りしていくための素地の育成に力を注いでまいります。

次に４ページをお願いいたします。新たな学びのために必要な工夫についてご説明させていただきます。これは、ある学校の授業の様子です。教師によるこれまでの一方向の授業だけではなく、一つの教室の中で多様な学びが展開されております。個別学習やグループでの協働学習、一斉学習が、子どもたちの知的好奇心や主体性に基づいて行われております。こうした新たな学びのスタイルが、今後の学校現場で、より一層広がっていくことになります。その一方で、現在の学校空間では制約もあり、改善が必要となってまいります。具体的には、教室で多様な学びを展開できるよう、余裕のあるスペースの確保や、机や椅子の配置転換が容易な環境、アウトプットを促す手段の充実が必要となります。学校図書館については、現状を見ますと、校舎の端に位置し、機能も限定されている場合がございます。これを STEAM 教育のような教科横断的で探究的な学びにも資するよう、電子図書やパソコン等を整備し、多様な情報資源に触れられる場に変えていくことも考えられます。その上で、図書館らしい静かで落ち着いた環境を保ちつつも、多様な交流を促し協働的な学びにもつながるよう、校舎の中心など、アクセスしやすい場所に整備していくことが望ましいというふうに考えております。

次に５ページをお願いいたします。ここからは、改めて北九州市の現状と課題、具体的な施策について説明いたします。

まず、子どもたちの学力向上について、これまで様々な施策を講じてまいりましたが、全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均を下回る状況が続いております。

６ページをご覧ください。その一方で、「授業改善」には成果が現れはじめておりまして、授業の理解度等については、多くの項目で向上が見られます。

７ページでございます。令和７年度の全国学力・学習状況調査の児童生徒への質問調査結果を見ますと、子どもたちが「個別最適な授業」を受けたと感じているかなどの項目は、全体的に全国平均よりわずかに低くなっています。また、学校の授業時間以外の学習時間が全国平均に比べてかなり低い状況にございます。このため、学習内容を定着させるための取組みの充実が重要と考えられます。

８ページをご覧ください。冒頭に申し上げました「３つのアプローチ」関係の施策をまとめております。まずは、「AI＋読書」について、AI 型学習アプリ（AI ドリル）は、令和８年度予算に要求中でございます。一人ひとりに合わせた問題提示や即時フィードバックで、苦手克服や得意分野の伸長に効果的とされ、自動採点機能により教師の負担軽減にもつながります。また、授業における生成 AI の利活用推進についても今後検討いたします。読書関係では、協議２の「子どもの読書活動推進について」で詳しく触れさせていただきますけれども、学校のいたるところに読書コーナーを設ける「学校丸ごと図書館」や、お気に入りの本を紹介し合う「ビブリオバトル」などの取組みを推進してまいります。

９ページをご覧ください。「体験活動の強化」、「脱・暗記重視」関連の施策についてでございます。市内の様々な体験施設から学校が行き先を自由に選択する「アラカルト方式による校外の体験活動」や、ロケット発射実験等のプログラムに子どもたちで取り組む「みらい探究プロジェクト事業」のほか、「スー１★GP」や「KitaQ Girls Tech 事業」などにも、引き続き取組んでまいります。こうした取組みの積み重ねによりまして、時代に合った「新たな学び」の実現を教育委員会一丸となって目指してまいりたいと考えております。

次に、「新たな学校のイメージの具体化について」ご説明させていただきます。

資料２の１ページをお願いいたします。現在、教育委員会では、これからの学校のあり方について、長期的視点を持って検討を進めているところでございます。まず、検討の背景についてご説明させていただきます。

資料の３ページをお願いいたします。最も重要な点は、資料１でもご説明いたしました「新たな時代に対応した学びの必要性」です。このページに掲載いたしました資料は、内閣府が令和４年に示したものですが、こうした方向性を踏まえた学びを実現するための学校を作っていく必要があると考えております。

４ページをご覧ください。背景の２つ目、「本市の現状と課題」でございます。まず、少子化についてですが、令和７年の本市の児童生徒数は、昭和３８年のピーク時と比べて、６５％減少しております。児童生徒数の今後の見込みにつきましては、折れ線グラフの点線部分に示しておりますけれども、国立社会保障人口問題研究所の将来推計人口をもとに算出いたしますと、令和１７年には、現在より約２３％減少すると予測されております。

５ページをお願いいたします。学校規模について、これまでの推移と、今後の推計を示したものでございます。棒グラフは、昭和３８年以降の学校規模の推移でございます。小学校、中学校ともに小規模校が増加しています。円グラフは、現在と令和１７年の比較です。小学校は、令和１７年には半数近くの学校で、全ての学年でクラス替えができない、「学年単学級」以下となる見込みでございます。また中学校では、令和１７年には、３学年の合計で８学級以下の小規模校が、現在の３割から５割に増えると予測しています。

６ページをご覧ください。次は学校施設の老朽化の状況でございます。棒グラフは、建設年度ごとに学校数を積み上げておりまして、左に行けば行くほど古い学校ということで、小学校は昭和４６年、中学校は昭和３５年が建設のピークとなってございます。本市の学校施設長寿命化計画では、築４０年を大規模改修を行う目安としております。小・中学校ともに、築４０年以上の学校、つまり点線から左の学校が現時点で約８割を占めておりまして、今後、大規模改修や建て替えの時期が重なることが予測されます。

７ページをご覧ください。こうした様々な背景を踏まえまして、「北九州市こどもまんなか教育プラン」を、昨年策定いたしました。ここに示しております、５つの柱に基づきまして、子どもたちの個性や多様性を尊重し、子どもたちそれぞれが持っている可能性を発揮していけるような教育を推進しているところでございます。

８ページをご覧ください。この教育プランは、令和１０年度までの５か年計画となっております。教育プランをベースにしながら、さらにその先を見据えた長期的な視点で、これからの時代における最適な学校のあり方を、今の時点から考えて着手する必要があると考えておりまして、現在、教育委員会で検討しておりますのが「新たな時代の教育デザイン」です。北九州市の学校教育を、これからの時代に対応し、かつ持続可能なものにアップデートするため、教育プランで掲げております、「こどもまんなか」「質の高い教育」「持続可能性」「教職員のウェルビーイング」、この４つをキーワードに、新しい時代の学びができる「小中一貫校」を、複数の学校を集約する形で、新しく作っていきたいと考えています。このページの絵は、前回の総合教育会議でお示ししたものでございます。子どもの安全安心から、教職員の働きやすさ、デ

ジタル化、再エネ利用まで、学校で創出しうる価値を網羅した総合的なイメージとなっております。その中でも最も中核となるのは、右下の「学び」の部分となります。一斉授業ありきで作られた今の学校や教室ではなく、多様で先端的な学びを実現する学校で、「教育内容と活動空間の充実」を図りたいと考えております。

次に９ページをお願いいたします。子どもたちの意見でございます。教育プラン策定時に実施した全校アンケート結果から、授業がとても簡単、あるいは逆に、とても難しいと感じている子どもが一定数いることがわかりました。また、学校が古すぎるなど、ハード面に関する意見もございました。下の段は、１１月に開催された「みらい政策委員会」での市長への提言の内容です。生徒一人ひとりが「自分の学びをプロデュース」できる環境づくりや、体験学習、AI を活用した主体性を育む取り組みなどが、市長へ提言されたところでございます。こうした、子どもたちの声にも応えていく必要がございます。

１０ページをご覧ください。目指す方向性、それから求められる学習・学校像でございます。資料１と重複するので詳しい説明は割愛させていただきますけれども、これらの学習の成果を実現するためには、一定の集団規模の中での人間関係の構築や義務教育９年間の連続した教育、専門性の高い指導などが必要となってまいります。それを実現するのが、「施設一体型の小中一貫教育」であると考えております。

１１ページ・１２ページでは、文部科学省の資料をベースに、「新たな学校のイメージ」をより具体的に示しております。

まず最初に教室でございます。

１１ページでございます。先ほどご説明させていただきました新たな学びを実現するため、一斉に学ぶ、個別に学ぶことやグループ活動といった多様な学習活動に対応するため、レイアウト転換しやすく、アウトプット手段を充実させた教室となっております。

１２ページをご覧ください。可動式の間仕切りや繋げて使える連続教室に、動かしやすく、様々な活動がしやすい机や椅子、モニターやホワイトボードを装備した教室のイメージとなっております。

１３ページをご覧ください。次に、学校図書館です。こちらも資料１で説明いたしましたように、学校の中心にあって、多様な交流を促し、探究的な学びにつながり、また各教室のアクセスを高めて、子どもの居場所にもなるような場所とすることを考えております。

１４ページをお願いいたします。教職員が活動する空間につきましても、これからの時代を踏まえた在り方を考える必要がございます。個人の作業はもとより、授業の研究や情報交換を行うスペース、セキュリティが確保された共用の収納スペース、それからリフレッシュできるスペースを設けて、教職員にとって働きやすく、働きがいがある空間とすることで、教職員のウェルビーイングを高めつつ、教職員の質を向上するという視点も重要となってまいります。

１５ページをご覧ください。最後に学校全体に共通するイメージです。子どもたちが快適に過ごすことができ、バリアフリーや多様性に配慮したインクルーシブな空間となることによって、誰一人取り残さず、全ての子どもが取って居心地の良い、安全安心な学びとなることが必要であると考えております。

１６ページをお願いいたします。この教育デザインでは、全ての子どもを守り、その可能性

を開花させる居場所、居心地のよい学校をつくるために、新たな学びと安全安心を実現するハードと、時代が求める新たな学びを作っていくソフトの両面から、新しい学校の姿をデザインしてみようというものでございます。現在、教育委員会で検討を進めているところでございます。本日の議論を踏まえた上で、今後さらに検討を深めてまいりたいと考えております。簡単でございますが、議題１の「新たな時代の教育デザインについて」ご説明させていただきました。よろしくお願いいたします。

大坪委員

１０月の定例会見で市長からは具体的に３つのアプローチという形で新たな学びの方向性についてご指示いただいておりますので、これを中心に具体化してくのはもちろんなんですけど、私なりにこの３つ、市長が挙げられたポイントとか、あるいはどんな子どもたちを市長は育てていきたいと考えられているのか、想像してきましたので、私の受け止めが大きくずれていないかどうかを確認するために、私の受け止め方を少し紹介させてください。

結構この３つ、時間かけて考えました。これを考えていて、一番最初にようやく浮かんできたのは、次のような言葉です。私の先輩から教えてもらった言葉なんですけど、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というアイルランドの作家でオスカー・ワイルドという人の言葉だそうです。この言葉の意味は、物事を考えたり判断したりするときに、自分の経験だけを頼りにして判断すると、時々大きな落とし穴に陥ってしまう。だから、先人たちがどういうことを考え、取り組んできたのか、歴史を学ぶことによって、そういう間違いを少なくすることができるよということを指し示す言葉だと、先輩から教えてもらったんです。当時まだ３０代で結構仕事できるようになって、「俺にできないことはないぞ」くらいの結構生意気な認識になりつつある時だったので、自分の知らないことって本当にいっぱいあるんだろうなと。それをやんわりとたしなめてくださったのかなと思ったんですけど。

この言葉が、今回、武内市長がお示しいただいた３つのアプローチで、私の中でもかなり重なるものでして、このことわざも経験だけに頼って判断すると、落とし穴に落ちるかもしれないよと述べているんですけど、経験を否定しているわけではないです。経験がなかったら僕らはほとんど判断できませんし、実際にどうなんだろうということを本を読んだって具体的に想像することもできないです。小学生、中学生の段階では、それこそどれだけの経験を積むかによって、考えていく基礎が子どもたちに伝わっていくので、そういう意味で２つ目の体験機会の強化っていうのもお示しいただいた。

その上で今度は歴史に学ぶということなんですけど、それだけに頼っているとおそらく子どもたちはこの変化の激しい社会の中でついていけなくなってしまう。だから本を読んで、狭いトピックスかもしれないけれども、深い思考を読書によって身につけたい。あるいは AI の使い方はいろいろあると思うんですが、今、生成 AI で持っている機能は情報を集めてきて要約して読むことができます。おそらく一生かけて１万冊とか１０万冊の本読むのは現実的ではないかもしれませんが、生成 AI の助けを借りると全文は読めなくても、１０万冊分のメッセージのカテゴリみたいなものを整理してくれることができる。だから浅く広く知識を得たいというのが、AI というのが有効なので、あえてこの AI と読書というものをプラス記号でつなげてご提示いただいているんだろうなと思いました。当然、読書の中にも経験の中にも十分吟味をしたうえ

で自分で考えてそれらの情報を使って考えていかなければいけないことなので、ただ単に昔の人がこういっていたとか、私はこういうことをしたことがあるからというような非常に薄っぺらなことといいますか、そういう考え方の形を暗記主義という形でご指摘いただいたのかなと。そういう意味で、この３つのアプローチで、私なりにはまとめさせていただいたのは、吟味した情報を基に自ら考える力を持ったような子どもたちを育ててほしい。だからこの３つの具体的なアプローチをお示しいただいたのではないかと受け止めたのですが、外れておりませんでしょうか？ぜひご意見お聞かせいただけるとありがたいなと思います。

市長

ありがとうございます。外れる外れないとかそういうことではありませんが、北九州市がより多くの人に、企業の方にも選ばれ、この街で住み、生まれ、学び、働くという街になっていくということが、市政としては大切なテーマになってくるわけですが、そうした中で、教育の面で学力というところがどうしても中々正面から対峙されがたかったという問題意識が私自身はまずあります。

学力の話をすると、非常に地域の差もあるとか、いろんな個々の事情もあるとか、まあそういったことで、本当に学校教育の現場では先生方が大変努力をしてくださっているということの積み重ねの中にあるんですが、そこに向かって対峙をしていかなければいけないという危機感、それからもう１つが時代認識。時代がテクノロジーも変わりますし、子どもを取り巻く環境も変わっている中で、その流れに子どもたちが流されてしまってはいけないという危機感、こういったものが背景にあって、１つの注力事項としてこれを発表させていただいたという、そういう流れですね。もちろんもう教育自体が広範なテーマなので、これが全てではないですけど。

まず基本的にここでもう何回も申し上げているかなと思うんですけど、子どもをスペックで捉えるのではなくて、やっぱり存在として捉えることが絶対的に大事だと。すなわち、スペックやスキルを上げるということではなくて、ケイパビリティを上げるということではなくて、存在ある種のビーイングとしてどういうふうに豊かになってもらうか、幸せになってもらうかということが大切なテーマだと考えています。

学力向上というテーマから若干逆説的なことを言っているようですが、学力というのはやはりその人にとっての選択肢を増やしていく、より自由にしていくという意味においてやはり大事だという考え方。これは別に大学の選択肢が増える、就職の選択肢が増えるという意味ではなくて、思考が自由になっていく、感じ方の引き出しが増えていく、あるいは自分の行動のクリエイティビティが高まって、こういうような選択肢が高まって自由度が高まっていけること。やはり自己選択、自己決定をしていくということ。自分のアイデンティティに基づいて、考え、アクションできるということが人としての幸せを作っていく上では大事な要素だということがまず根底にあります。

今回この３つを掲げたのは、いろんなことが今、子どもたちに押し寄せているということです。私もデータを見させていただいたら、北九州市の子どもたちのまず勉強時間が少ない、就寝時間が遅い、Youtube を見てる時間が長い。もう一つくらいあったと思いますけど、全てが綺麗に政令市の最下位をなぞっているということを見たときに、これはちょっといかん。全てが

紐づいているということで、この流れを変えていかなきゃいかんなという問題意識がありまして、より絞り込んでいったんですけども、この３つの要素をもう少し、大坪先生がおっしゃったように、３つの隠れテーマは何ですか？ということですね。欠如をなくしていこうということです。

まず、「AI+読書」は内省の欠如ですね。内省の欠如に対してどう対応していくのかという考え方です。これはもうあまりにも情報過多でショート動画も沢山あって、次から次に刺激過多で。昔、私たちがやってたように、ぼーっと物思いにふけったり、プルーストみたいな世界ないですよね。なんかぼーっと考えたり、いろいろ妄想にふける時間ってないし、妄想および自分で日記を書いたり、自分でどうだったかなと思い返す時間が、あまりに子どもは今なさすぎるという、そのすごい高尚な意味の内省をして、自分の人間としての振り返りをしてほしいという意味じゃなくて、リフレクションする時間がまずないと。AI でよりクイックになると、もうすぐもう１秒で答えが来る時代になっていて、どんどん内省は失われていくってことに対して、しっかり対峙していかないと大変なことになるということ。それはだから AI を使いこなそうということは、AI を便利に使おうということだけではなくて、AI とうまくマネージしないといけないということが問題の根底です。そうしたときに、「AI+読書」とあえて書いたのは、読書は非常に我慢強い行為。それで何度も何度もぐるぐるぐるぐる回る、非常に苦痛な作業です。今の時代においたら。それを苦痛と言ったら言い過ぎかもしれませんが、そういったことを繰り返しながら、瞬時に答えをくれる AI をマネージしながら、自分の中の内省につなげていくということをどうやっていくのかということをやらなきゃいけないというのが１つです。

２つ目の欠如というのは、もう言うまでもなく手触りの欠如です。もうみんないろんなゲームしてますけど、それはそれでいいんですけど、それはそれで大事なことかもしれませんしね。バーチャルの中で繋がるということも。ただ、あまりにも手触りが欠如しつつあるということで、今もう団地の中を歩いても一人もほぼ遊んでいる子はいないみたいな世界もありますし。やはり手触りの欠如というのも対峙していかなければいけないということがやはり経験です。経験はすごく俗物的に言えば、経験によって学力が上がるとか、経験によって将来的に経済的に暮らしていくための相関を示すということもありますけど、そういう俗物的なものももちろん否定しませんけど、やっぱり手触りの欠如というものにどう対峙するかということですね。

３つ目が、今の時代の子どもたちを囲む、あるいは私たちを囲んでいる問題意識として、やっぱり複雑性の欠如というのは複雑性理解の欠如と言ってもいいです。全ての物事をシンプルな構図にし、例えば対立構造にしたり、白か黒か、そういうふうに単純な構図で世の中を明快に示すことが称賛され、そこにみんなが飛びつくということで、私たちは政策や事業をやってても、すごくシンプルに、なんかこれどういう理由でやるのか、正義なのか悪なのかみたいな、実際の物事ってものすごく複雑性を持っていて、いろんな要素があるので、そう単純に割り切れるものじゃないんだという、この複雑性への理解の欠如というのが、今の子どもたちを取り囲んでいて、これは私たちも取り囲まれていると思います。ファンかアンチかみたいな、そういうのもあります。だからそういう単純な構図を脱していくという複雑性が今、欠如しているというところに対して、やっぱりあの対峙していくような打ち手をしっかり持っていかなきゃいけないのではないかということです。

今ちょっと大坪先生から問いかけがあって、私も改めて今考えると、そういうことかなと思います。なので、内省の欠如と手触りの欠如、そして複雑性理解への欠如というところに対して対峙するというのが一つのキーテーマかなと考えております。

大坪委員

ありがとうございました。具体的な取組自体よりも、そこで何を意図されていたのかというのを改めてご説明いただいたので、ものすごく３つについては表面的な取組以外にもいっぱい何か関連性があるところがいっぱいありますので、そこも併せて強化していきたいなと改めて思いました。

リフレクションの欠如のところについては、それこそ今学習行動自体の流れがもう随分変わりつつあります。従来、典型的にいうと、１時間の学習活動を目当てというぐらいに沿ってまとめられてあげると、最後１つのまとめというか、みんなで同じ答えに到達するというのが学習活動の基本形として小学校・中学校でも流れているベースなんです。今は選択肢のある形でのまとめみたいなことがもう出始めてきて、それにずいぶん経験積んできている、触れている子どもたちもある。そういう学習活動の流れになるということも関係して、授業改善みたいなこともできると思います。

手触り感については、私説明を聞いてからとても一番新鮮でした。ただ、この手触り感っていうのは、今の学校教育の中で小学校１・２年生で展開されている生活科。生活科という中では、まさに手触りです。子どもたちのいわゆる認知発達の段階に応じながら、自分の身の回りというのがどういう物理要素でできているのか、生活のルールという文化的なものでつながっているのか。そういったことを直接経験しながら学習活動が展開されていますので、生活科の学習単元みたいなものが、おそらくその他の教科にもすごく参考になるのかなと思いました。

３つ目の複雑性の欠如については、ちょっと私も考えなきゃいけないなと改めて反省しました。ついついやはり単純さとか明確さみたいなものを求める方が頭の中がすっきりしてわかりやすくなっていくんですよ。全てのことをそのまま押し込めようとすると難しいところもあるので、これは宿題として持ち帰らせていただきます。

私、今年の３月に退職しまして、時間があったので、今 Netflix でアニメを１日に４時間ぐらい見てます。３年間分ぐらいのアニメを見ているんですけど、小中高校生たちが見てるアニメを見て感じるんですけど、僕らが見てた、自分が小学生・中学生に見た時のアニメよりも、今のアニメの方がものすごく複雑ですね。何が正義で何が悪なのかとか、一応悪役している人にもそれぞれの人生があって、恐らく正義側で出てきて登場している人も暗い過去があったり、それぞれの人生があったり、そういう意味でのところの複雑性へのアプローチさせる、子どもたちにアプローチさせるというのは、案外いろんなコンテンツから柔軟に考えていくとあるのかな、見つかるのかなということは想像させていただきました。勉強になりました。ありがとうございました。

香月委員

３つのアプローチについてご解説いただき、ありがとうございました。よく分かりました。市長が言われたように、学力は選択の幅を広げるという言葉は非常に私も共感するところがあります。学力をあげるには、やはり学習時間や睡眠時間とかそういったところの時間の使い方、

使い古された言葉ですが、生活習慣というのが非常に重要だと私は思っています。学習時間が短いというのは、いわゆる記憶を定着させる時間が短くなるので、当然学力はそんなに上がらないだろうということが予想されますし、睡眠時間におきましても、やはり成長期の子どもにとって睡眠時間というのは、食べることと同じように栄養というものでありますので、きっちりとした睡眠時間が、しかも規則正しく必要です。規則正しくないと、いわゆる成長に必要な成長ホルモンも出方からして違ってくるんですね。そういうことを考えますとやはり、あまりキチキチすると好ましくないかもしれませんけども、ある程度決まった規則正しい生活というのがやはり重要ではないかと思われます。新たな時代のデザインにどう、こういったことが反映されていくのかは分かりませんけれども、こういった基礎的なこともやはりちゃんと考えて、新たなデザインというのも考えていかなきゃいけないのではないのかなと感じております。よろしくお願いします。

市長

本当にそうですね。やっぱり大事なところで、今、その生活の中の刺激や情報、やはりちょっとそういうものが多すぎるので、早く寝るのも難しいし、自ら早く起きれないとか、朝ごはんが食べれないとか、本当にそれだけではないですけれども、そうなってくると親御さんとどう関わっていくかっていうことも論点にはなりうると思うんですよね。私もイギリスにいたとき、ペアレンティングエデュケーションというのを結構やっていましたので、もちろん学校と家庭というのは、非常にデリケートな役割分担があるので、なかなかいろんな議論があると思いますけれども、本当はちょっと視野を広くして、そういったものを全体像として組み合わせて、考えていくんだということもやりたいと思っております。それもまた全部含めてというのはかなり難しいところがありますけど、大きな目で見るとそういうところまで考えないといけないなと思います。

中島委員

先ほどの先生方もお話されていたような３つのアプローチ、３つの欠如についてご説明いただいた時に、私は普段、人の心理サポートをしているのですが、心理療法とか精神療法とか大事にしているところが通ずるなという感想を持ちました。そういった中で、日頃ですね、教育委員会会議の中で今後の教育について考えているものと一致してるなと思ったところは、今までの物事の枠組みにとらわれるのではなくて、その物事の枠組みを変えていけるかということは、心理療法の中でも大事にされていることですし、学校教育の中でも大事にしていくべきものなのかなと思ったところで、私の中でつながったというのがありました。というのも、今のお話を伺っていると、教育について新たな価値を提供しましょうというようなところに、我々も今目指している教育とか、今ご提案いただいている３つのアプローチとかがつながるなと思います。市長のおっしゃっている内容を今までのその教育とか学校の枠組みで考えちゃうと多分限界があると思うので、違った教育の在り方、違った枠組みっていうのを提供して、皆さんに「これ必要だよね」って納得してもらうところがすごく今後大事になるだろうなというふうに感想を持ちました。特にハード面での環境と心理面の相互作用というのは私関心ある分野なんですけど、ハード面から考えると、今の学校はやっぱりインプット重視、効率性を重視した「作り」をしているので、やっぱりその中で育まれるものっていうのはある程度限界があって。

よりクリエイティブであろうとすると、まずハード面から整えなおさないといけないのかなというところを多少思ったり、そういった学校の作り方、何かこういう方向で「学ぶってどういうこと」であるとか、「新たな教育ってこういうことが必要ですよ」というふうに発信していくことにもなるのかなとちょっと思ったところです。

そういったところで、今日事務局からご説明いただいたような内容は、なるほど、そのようなことは一つ一つ大切だよなというふうに思うところですし、何らか新しい学校をこんなふうに作っていきます。これぐらいの規模で、このような学びを提供しますというのを、今までの学校観や教育観にとらわれないように、そういった発信ができると、この本市の魅力にもつながるだろうし、本市で学ぶ子どもたちがより一層力を伸ばしていけるのかなというふうに思いました。ただの感想なので、コメントは求めませんので･･･というふうな感想でした。

市長

コメントしたくなりました。ありがとうございます。本当に今のお話の中で私が非常に共感するのは、ハードとソフトの相互作用というのはとても大事だと私も思います。例えば、病院建築とかですね。これまだまだ日本だと発展してないんですけど、病院の建築とかハードがどれだけ心理的あるいは疾病の治癒とかに影響するのか、結構欧米を中心に非常に発達をしている部分でもありますし、あと最近、企業なんかを見ても、もうそのクリエイティブなものを引き出すオフィスとかどういうようなハードでやるとコミュニケーションが取りやすいかっていうことに関しては、ものすごくもう深く展開されていますよね。

役所とか市役所とか公立施設ではなかなか予算の関係もあって、そこまで工夫する、例えばデザインやハードの構造の話であったり、そんなにまあ個性的に作れないという限界があるものの、やっぱりハードがソフトや思考や人間関係を基底にする。その人間関係がまたハードをうまく活用するという、この相互作用はとても大事だと思いますので、なかなか公立の学校でどこまでそれを意匠やらレイアウトやらデザインやらできるっていうのは制約は当然ありますけれども、そういった視点はすごく大事なものとして取り入れていきたいと思います。

郷田委員

私も感想といいますか、思いを述べるみたいな形になります。自ら進んで学び続ける子どもというのがスライドに書いていますが、私たちは子どもにそういうふうに自ら学んでほしいと思っている。では子どもはなぜそう思うのだろうと思うときに、正常なというか健全なというか、「欲」のようなものが子どもの中にあるといいんじゃないかなと思っています。

学びたいという思いがあって、これをやりたいから、そのために学びたい。で、そのために例えば、今こういったまあちょっとダラダラ動画を見ないで勉強してみようかなとか、そういうふうに自らの中から湧き出るもので取り組んでいくような子どもが増えていくと、いい形に回っていくのではないかと思っています。

例えば、美味しいものを食べたいと思えば料理のことを学ぶでしょうし、そうすればどうやって自分の知りたいことを調べたらいいんだろうかと進んでいくと思うので、一番基点は何をしたいとか、いろんなことを学んで自分の人生を充実させたいとか、そういう個人としての思いがそこにあるといいなと思っています。

そういった欲がある意味抑えられているのが旧来の教育だったのであれば、これからどう変

わっていったらいいのかなというときに、先ほどの話にもありましたけれども、環境って恐らく大きいのだろうと思います。

本が１冊もない廊下では本を読み出さないけれども、置いてあったらちょっと手に取って読むだろうという、ハード面の環境もあるでしょう。また、私も一人の保護者として、やはり家の中で全てを頑張ってやるというのはなかなか厳しいなというところがあります。やはり自分の枠からなかなか出れないなと思うと、いろんな大人から影響を受けて欲しい。色々な先生と触れ合ってほしいと思うと、いろんな先生が教師として働きたいと思い、またやりがいを持って働けるような学校現場になってほしいと思います。

それはもちろんソフトな面もありますし、先ほどお話がありましたけれども、ハードの面で年々おそらく厳しくなっていくだろうなと思うんですね。民間とかがきれいになっていろいろ整ってきてる中で、まだちょっとトイレだとか冷暖房だったりとか、環境的に厳しいとなると、今かなり先生方の個人的な思いに頼って協力をお願いしているところが結構あるんじゃないかなと思っています。

そういった面で、ソフト・ハードともにこれからのものに対して投資をしていかなければいけないという中で、やはり時間がいろいろかかるんだろうなと思っています。先ほどの中島委員のお話にもありましたけれども、今までなかったものって作るのが難しいという中で、IT 企業とかだと、昔はすごい時間をかけて計画を立ててプログラミングをして、何年かかけてソフトを作っていましたが、今は軽めのものを作ってプロトタイプとしてやってみようとか、モデルケースを作って、ちょっと支障があるかもしれないけど、それを改善していこう、そうじゃないと今のスピードには合わないよねみたいな感じになってきています。

教育は失敗するわけにはいきませんが、新しいチャレンジをリスクを抑えた状態で早めにスピーディーに始めるというのは大事ではないかなと思います。計画を立てている間にも時間は過ぎてしまいます。素敵な構想をいろいろ先ほどお伝えいただいたと思うんですね。一部だけとか１校だけとか、ぜひ早めに具体的なものを見せていただけると弾みがつくんじゃないかなと思いますし、より具体化されて進んでいくものではないかなと思いますので、そういったところをぜひ期待したいなと思います。

教育委員会の議論は学校が中心になりますけれども、学校が起点となって家庭があり、働く人がいて、街があってというまちづくりの観点にも寄っていくと思いますので、そのあたりは教育委員会会議の中でもよくお話はさせていただきますが、市のいろんな部局と協力しながら、ぜひ進めていただきたいなと願っております。はい、以上です。

市長

はい、ありがとうございます。そうですね、本当に郷田さんがおっしゃるように、自ら学ぶ内発的な学びをどう作っていくかはとても大事だと思います。本来的にホモサピエンス自体が学んだり、成長したりすることに動機はあるはずだと思ってるんですけど、それを阻害する、あるいは蓋をするっていうことがいっぱいあるので、そこを動かしていくということが大事だと思います。今おっしゃったように、私は好奇心とディシプリンが大事だと思っておりまして、好奇心をどう掻き立てていくか、好奇心の力をどう維持させていくか。好奇心があると楽しいと思うし、ディシプリン、自分の規律があると誇らしいと思えるし、その両方の要素が必要で

すし、そのためには経験が必要ですし、人も本と旅によって人は感化されるとよくいいますけど、やはり読書もそうですし、いろんな先生や大人に出会うのもそうですし、そういった地域の大人の人との広がりが開かれて広い先見をもつという体験をもつのも必要だろうと思います。やはりそういうような好奇心に刺激を与えていくことでディシプリンを習得する。

あと隠れテーマとしては、実は私は大人が勉強をしろと思っているんですよね。日本人の大人は、男性が平均７分～５分で世界最下位ぐらいの勉強しない大人たちが多い国になってしまっているので、大人が勉強しないで子どもに勉強の楽しさをっていうのは、それはなかなか難しいだろうと、これはちょっとまた学校と違う世界かもしれませんが、ということもあります。

あと、プロトタイプを作って、それをトライアンドエラーしながら回していく、これは非常に素晴らしいなと思います。本当にそれをまさに現場の先生方はそれぞれの範囲の中で、先生たちなりにいろんな工夫をされて、トライして、工夫・改善しながら試行錯誤されておられるだろうと思うのですが、やはりそれも学校で、そういった発想も、これからの教育行政は公平性とのせめぎ合いはあるものの、大事なんだろうと思います。

あと、投資の話も本当にそうで、これがもう悩ましいんですけど、学校に行った途端非日常になるっていうような状況を変えなきゃいけないと。家にいても外にいても、どこに行っても、和式便所なんか使ったことないのに、学校行った途端、和式便所という非日常。もちろん外にもあるのはありますけど。エアコンの問題なんかも、どこ行っても涼しく冷房効いてるのに学校行った途端、灼熱になってしまうという非日常。だから学校に行くと、そのネガティブな意味で非日常に出会ってしまうっていうのはなるべく無くしたいという思いは基本線としてあります。

ただ、投資には財源が必要ですので、気持ちはあるけど、なかなかスピードは瞬時に変わることはできないという制約がある中で、私たちも各課相応の気持ちであるところは正直なところです。でもしっかり投資をしていくということは大事だと思います。

清成委員

私の方からは最近ちょっといろいろ気になってたのが「定義」。私は職業柄、やはり法律に書かれていること、まず定義が何なのかからスタートするんですけど、どうしても教育の分野、あるいは時代が変わっていくこと、スピードの関係でなかなか定義づけが難しい。

例えば、いじめという言葉があって、じゃあ何をいじめというのか、どういう基準でいじめかいじめじゃないのかを判断するのかが非常にわかりにくくなってしまうと、それは萎縮効果。子どもたちのコミュニケーションだったり、そうした教育の現場だけではなくて、実はその社会のパワハラという言葉があります。じゃあパワハラって何ですか？明確に定義しないと、適切な上司から部下に対する指導・教育ができなくなってしまうこともあると思うんです。

そんな中で、実は教育委員会でも議論になったんですけども、読書ですね。読書活動の推進、じゃあこの読書ってどこまで言えますかというのが実は議論になったことがありまして、まず１つはその紙媒体のものに限るのか、電子図書などの電子データのものも含むのか、あるいはその文字だけのもの、写真だとか絵だとかはどうなのか、SNS、こういったものも文字情報なので、読書に含めていいのか。昔はどうしても情報を得るとなると、文字通り本に書かれた紙媒体のものが中心だったんですけども、昨今は紙媒体のものはもちろん残ってはいるものの、電

子情報だとか、そういったものを中心に情報を得ていく時代になってきているので、そういったものも含め、細かく分類しながら何をどういうふうに推進していくのかということを考える必要性があるのかなと思います。

SNS を否定する気もなくて、SNS も本当に即効性がある情報だったり、タイムリーな情報だったり、あるいは多様な情報が即座に入手できる、あるいはそれを情報消費、消費という言葉で最近言い出したんですけども、まあ娯楽的な形でそういうものを読むことができる。こういったメリットはあるんですけれども、他方で先ほど市長も触れられたと思うんですけれども、情報過多によって混乱が生じたりだとか、あるいは情報自体が断片的で体系的な思考ができるような内容になっていないので、SNS を読んでもいいねを押して終わりみたいな深く思考しないまま、なんとなく読み流してしまうということも起こっているので、今後、情報化社会ですので、なかなかその情報を食い止めることも、整理して子どもに渡してあげることもどこまでできるかわからないんですけれども、こういった SNS だとか、そういった情報と、それからその読書という、市長も触れられたと思いますけど、ゆっくり読んで、ゆっくり思索にふけるというか、ぼーっとする時間というのも用意してあげながら読書活動というのは推進しないと、ただ、読め読め読めというだけだと、何を読めばいいんだというところになってしまって、それは読書といっても今いろんな媒体があるのでそういうのを分類しながら、子どもたちにバランスのいい読書活動の推進をしてもらいたいと思います。

ただ、どうしてもいろいろ思考を深めたりだとか、読書というのは心の余裕とか時間的な余裕がどうしても必要になるんですけれども、これは大人もそうですけれども、最近はコスパというか、タイパ、タイムパフォーマンスとかいう言葉もあって、いかに効率良くするかという時代になってきているので、なかなかこう時代の流れとの両立は難しいと思うのですが、子どもたちにはそういう時間を用意してあげたらいいのかなと思っています。感想です。

市長

はい、ありがとうございます。私が一言コメントするようになっていて申し訳ないんですけど、本当に共感する非常に大事なテーマで、定義の問題というのは、あの、今かなり危うくなっていると思います。曖昧なために、ここでコンフリクトというか衝突が起きていることはたくさんあるし、定義というものがあらゆるものになんか総体的になりすぎているがために、非常にそれぞれが勝手な解釈を。もちろんそれ人それぞれに真実があるのはいいとしても、やはり曖昧さがぶつかり合うと、不幸な対立をしてしまっていることが多々見られることですので、それは大事だと思います。やはりコミュニケーションをしていく上でも、説得性とか信頼性を持つために定義がはっきりしないと混乱を生み出す。あと、ブレをなくすというのも大事かと思います。自分にとって友達とは何かとか、仕事とは何かとか、自分にとって幸せとは何か、そこまでの定義の話も視野に入れると、やはりそれがないが故に、結局自分がちゃんと誰かが納得できる形で毎日を送れているのかとか、自分の日々が意味あるものなのかということを考える上でも、定義を考えてみないということによって生じるブレというのが、非常に深刻な問題だなと思います。

取り組みを進める上ではもちろん読書とは何か、多様な学びとは、主体的な学びとはというのは、やはり私たちが深く理解をして、共有しておかないと、実践の段階に至って指示がバラ

バラになってしまうと、結局、理解が伴わないでルーティン化され展開されるというのはあまり意味がない、言葉の定義、それを留意することかなと思います。

教育長

普段、教育委員会会議で実はこれほど議論をすることがないので、５人の委員さんから伺う話で、本当に感動をしております。私、もう一つの立場として事務局を預かるという立場がございますけれども、もっとこういう話をやはり普段からやらないといけないなと思います。本当に総合教育会議で感じました。まずはそれをお礼申し上げたいと思います。

これからの学びをどうするかということですが、もう１００人いれば１００通りの考えがあって、これをどういうふうに同じベクトルの方向を向けていくかということで、今、市長、副市長と様々なことを議論させていただきながら進めていますので、またそこに、今日お話しいただいたようなことを、また別の場でも議論を一緒にして、また市長、副市長にもぶつけていきたいと思います。簡単ですけど、ちょっとした感想です。以上です。

【協議２】子どもの読書活動推進

中央図書館長

本日の説明の内容は、ご覧の５つの項目でご説明いたします。はじめに北九州市における読書活動の推進は、このようなプランや計画のもと、私たち図書館、学校、地域の関係が一体となって推進していくものです。本日はこれらも踏まえましてご説明いたします。

では、まず子どもを取り巻く読書の現状と課題についてご説明いたします。SNS や AI の普及、そしてコロナ禍で定着したデジタル中心の生活様式は、子どもたちの生活にも大きな影響を与えております。北九州市においても読書離れを生み出しています。

しかし一方で、先ほどから話題になっておりますように、新しい時代の学びとして AI が進化する今だからこそ、読書の価値が再認識されています。子どもたちの物事の全体を捉える力や学習の基盤となる言語能力、深い思考力や共感力は、読書を通じて育まれるからです。

このような力は、これからの未来を生き抜く子どもたちには不可欠です。だからこそ、学校、図書館、家庭、地域がこれまで以上に連携して、子どもたちの読書活動を推進していくことは非常に重要だと考えております。この重要な課題に対し、北九州市では、言葉の力と豊かな心を育み、未来を担う人材を育成するため、学校と図書館が車の両輪として連携し、それぞれの強みを生かして読書活動を強力に推進してまいります。

学校は教育活動と連動させ、日常生活や学びの中で読書の価値や楽しさを実感し、子どもたちが読書習慣を身に付け、学びを深める場を提供します。一方、図書館は、多様な本との出会いや交流、情報提供を通じて好奇心を刺激し、読書の世界を広げる役割を担います。

では、まず、学校における読書活動の推進についてご説明いたします。学校はこれまでも魅力ある学校図書館づくりや読書の楽しさを味わうことができる活動の工夫を行ってまいりました。そのような活動を基盤に、読書に関する取り組みをさらに進化させてまいります。

本日は、その中の２つの取り組みについてご説明します。

１つ目は、学校の読書環境を大きく拡大・進化させる「学校まるごと図書館」です。教室や廊下、空きスペースなどに読書コーナーを設けるなど、子どもたちがいつでも本を手に取れる環境をさらに整えます。これにより、本との出会いや読書を日常生活の一部とし、子どもたち

の読書活動をより身近で積極的なものにしていきます。

２つ目の取り組みは、１０分間読書などの読書時間の確保に加え、読書を通した交流の機会を増やし、読書活動の活性化を図ります。例えば、先生方のおすすめの本の紹介、学校でのビブリオバトルやブックトークなど、個人で楽しむ読書に、みんなで楽しむ読書を組み合わせる「読書交流」を推進することによって、読書を介した会話を生み、感想の違いを通して多様な考えを受け入れる素地の育成を推進いたします。

次に、もう一つの大切な柱となる図書館における取り組みをご説明いたします。情報やエンタメの選択肢が溢れる現代において、図書館離れや読書離れが進んでいるのが現状です。図書館もまた、従来のイメージを打ち破り、読書活動を活性化してまいります。

私たちが掲げるのは「エンタメ図書館構想」です。私たちが目指すエンタメ図書館とは、知的好奇心を刺激し、感性を育む「ワクワクする居場所」です。子どもたちをはじめ、あらゆる世代が訪れるたびに、新たな発見や感動に出会い、読書の新しい価値を実感できる場へと図書館を進化させていきたいと考えています。

それでは、取り組みの具体的なイメージをご説明します。まず、子ども図書館では、子どもをターゲットに発達段階に応じた体験型授業を展開していきたいと思っております。例えば、乳幼児期には音と映像を組み合わせたベビーリーディングで本への興味を引き出します。

また、小中学生に向けては、ビブリオバトルの市内大会などを開催し、本の魅力をより広く熱く語り合う場を提供します。読書の楽しさを体感できる機会や読書を通じた交流の場を提供していきたいと考えております。

次に、図書館は地域との連携を強化し、多世代が交流する「ワクワクする居場所」を創出します。地域の方々や専門機関と連携し、子どもたちが大人から学び、大人が子どもの視点から気づきを得るような多様なイベントやワークショップを企画していきたいと考えています。

図書館が地域と協働することで、子どもたちの知的好奇心をさらに広げ、地域全体の読書を通じた学びを推進いたします。さらに、大人から子どもまで、自宅や外出先など好きな時に好きな場所で読書ができる電子図書館を充実させたいと考えています。

時間や場所にとらわれず、誰もがいつでもどこでも読書を楽しめる環境を充実させ、読書へのアクセスをさらに広げてまいります。また、物理的な図書館空間では、多様なニーズに応じた「居場所づくり」を進め、誰もがくつろいで読書に親しめる心地よい空間を提供してまいります。これらの取組を通じて、図書館としても子どもたちの読書活動を力強く推進してまいります。

最後に、本日のまとめです。私たちが目指すのは、子どもたちが読書の楽しさとその計り知れない価値に気づき、本を一生の友とすること。そして、その中で深い思考力や共感力、想像力を育み、読書習慣を確かなものにすることです。そして、読書を通じた多様な交流が生まれ、豊かな生活を創出し、読書文化が息づくまちを築いていきたいと考えています。学校と図書館が手を取り合い、本との出会いを通して、子どもたちの広がる力と豊かな心を育み、未来を担う人材を育成してまいります。説明は以上です。ご協議、よろしくお願いします。

郷田委員

ありがとうございます。先ほどの議論の中にもありましたけれども、子どもに読んでほしい

のであれば、まずは大人が読む環境になるといいなと思います。
　労働しているとなぜ本が読めなくなるのかみたいな本が、近年話題になりましたけれども、本当に読めなくなるなと私個人も思っていて、図書館のサービスが大人にとっても利用しやすいような形で色々なところで提供されると、楽しく本を読む大人がいて、で、子どもに展開してっていう形になっていくといいなと思います。「エンタメ図書館」というキーワードが非常に面白いなと思っておりますので、今後の取り組みに期待したいなと思います。
　図書館とか本に関しては、非常に思い入れのある大人が多いので、いろんな協力を色々な方から仰いでやっていくというのもありかなと、お話をお伺いしながら思いました。自分好きな本を推したい人とかいたりすると思います。以上、感想になりますが、ありがとうございます。

中島委員

　私も感想なんですけれども、先ほど清成委員からもありましたが、読書の場をどう定義するかというところですね。これまでも教育委員会会議でもでてきたところですけど、やはり広く門戸を広げるということとか、エンタメ化して、その敷居を下げるということの取り組みがすごく大事だなと思いますし、そういったところは、糸口として、やはり読書を通じて、どのように思考を深められるかみたいなところをですね、こう持っていけるような、そういった流れができればいいなと思ったところです。
　市長からもありましたし、やはり言語発達と思考の発達というのはすごくリンクしているところがあるので、どのように言葉巧みに考え・思考を巡らせることができるかということと、私たちがどのように深く考えるのかということは結びついているのかなと思いますので、このように入口をもっと広げて、その行き先をしっかり深みのあるものにしていくということですね。そのために、本当にこのようにエンタメ化するとかですね、様々な本、書物を読書と定義しますよみたいなところは好感が持てるところです。
　また、さらに今まで本というと私たち一方的にインプットする側として多分認識していたと思うのですが、このように位置づけることによってアウトプットするもの、例えばビブリオバトルだったり、自分でその本の魅力はこうだというふうに語るとか、自分はこの本を通してどう考えたかというのをアウトプットする場・コミュニケーションする場というふうに発展していけるというのは、読書を違った活用をするということで大きなポイントかなと思います。
　ちょっと私の個人的な感想としては、この中にアウトプットする活動として、本を作ってみる、書いてみるみたいなものがあまりなかったので、口頭で本を語り合うというのはありましたけど、そういった自分で作る、例えば物語を書いてみるとか、自分が興味あるもののノンフィクションを書いてみるとか、何かそういった書いてみる、本を実際に作ってみるみたいな活動も今後加わっていろんなアウトプットの仕方が図書館や読書を通じて展開するといいのかなと思いました。

香月委員

　私も感想なんですけども、SNS 等でビブリオバトルとかいいのではないかとか、大人が借りに行く時間がなければ電子図書を図書館に入れるようになったらいいなとか、子どもさんとかは特に何かきっかけがないと、本とかそういった電子書籍も含めてですけど、手に取るとか見てみようとかいう気になれないので、それをできるようなきっかけとして、廊下に本を置くとか

いった「学校まるごと図書館」こういった取り組みは、とてもいいのではないかと考えました。以上、感想です。

清成委員

頂いた資料の中に、ビブリオバトルだとか、これは読書ではないんですけども数学の分野でいうとスー１★GP だとか、そういうのを開催していらっしゃる。ビブリオバトルに参加したという生徒とは関わったことはないんですけど、スー１★GP に参加した子どもと話す機会があって話を聞くと、競争感とか子どもたちが熱意を、すごい気持ちを入れて勉強もするし、といったきっかけになっている。

読書も子どもに対して好奇心を持ってもらうというのは、市長も言われていたように体験というのも大事な要素だと思うんですけども、そうやって子どもたち同士が競い合ったり、そして自分が何かしたことを発表する場、アウトプットできる場、そしてそれをみんなで認めてあげられる場というのももっと用意してあげられると、子どもたちの好奇心、読書に対する関心も高まっていくのかなと思いました。感想です。

大坪委員

私、勤務していた大学で、図書館長を５年務めさせていただいて、大学生の段階で図書館利用の個人差はすさまじいものがあります。４年間で１回しか来ない学生もいれば、ほぼ毎日、４年間来ている子もいます。

来ている学生の１番多い利用形態は、期末試験前に勉強しに来るというのが典型的な例ですけれども、やはり利用形態としては、ここまで個人差があるのかというくらい広がってきています。嫌いな学生は強いてどうの言う必要はないかなと思うんですけど、小学生、中学生ぐらいの間には一定量の読書経験は、子どもたちが嫌がったとしても、なんとか手を変え品を変え、経験をさせてあげないといけないのかなと思います。

市長もお話しされたように、本を読むというのはやはりエネルギーかかるんですよね。文字を追っていかないといけないので。エンジン負荷がかかってきて辛い、疲れる作業ではあるんですけど、読むこと自体はやはり他者の考えに自分の思考を合わせていくというようなプロセスになってきますので、それこそ他者の思考に同意をしているわけですから、他者の視点でリフレクションも行うということで、考えるということは、僕らは言葉を使って考えますが、本を読むことが考える練習になるのは間違いないです。では２００字とか３００字ぐらいのボリュームでもいいのかと言うと、全然読まないよりかは２００字、３００字を読んだ方がいいとは思いますけど、やはり１００ページ５００ページぐらいのボリュームを辛抱強く読んでいくということは、ある程度経験させてあげないといけない。

今日、ご紹介いただいた取り組みも図書館に関わる人たちが知恵を出して取り組んでいることなので、今は根気強くこれらの活動を続けていこうかなと思います。感想です。以上です。

大庭副市長

一市民の意見としてお聞きいただきたいのですが、比較的、私は子どもの頃から常に身の回りに読みかけの本が近くにあるという環境で今も生きているのですが、ふと思った時に、子どもの頃は親が与えてくれた本を半強制的に読まされていて、かつ読書感想文を書けと言われて、学校の先生なりにそういうようなしつけをされてきたんですけれども、一方で、郷田さんがお

っしゃっていた話と近いですけれども、仕事をしているとなかなか図書館に行くっていう時間を確保するのが難しくて、今はネットで本が購入できるから結構本を買ってしまうんですけど、そうすると逆に今、AI が今までの購入履歴で類似本ばかり上のほうに推薦本として出してきてしまうっていうことと、あとはやはり自分のお金で買うとなるとあんまりチャレンジしにくいというか、どうしても関心のある本ばかり最近読んでるなという気がしました。

その中で、やはり大人は少し本を読みながら知識・経験を共有という意味では、図書館の本を借りるというのはすごくチャレンジしやすいので、ネットで予約できて近くで借りられるみたいなサービスがあったら大人も本が読みやすいかなと思いながら聞いていました。

もう１点だけ申し上げますと、私はデジタルか紙かというと、完全に紙派なんですね。それは読んでいる感じがするっていうのと、市長も大坪先生もおっしゃってますけど、あんまり面白くないなと思いながら読むのってさらにきついと思うんですけど、でも紙だと途中で投げ出すのにデジタル以上に罪悪感があるような気がして。だからそのつらい作業も最後まで頑張るみたいな。そういうところも含めて、私はぜひ子どもたちにはやっぱり紙の本を読んでほしいなというのが個人的な感想でした。

市長

本当に今日は皆様ありがとうございました。非常に皆さんから多角的なご意見を頂いて、創発的な議論ができたということを心からお礼を申し上げたいと思います。

やはり北九州市にこういった見識のある皆さんが、今後将来に向かって知恵を合わせていくということが大事だと思います。どうしても今、現場の先生たちが一生懸命日々限られたリソースの中で一生懸命頑張っておられる。それでも社会全体で学校に対するプレッシャーや学校に対するリクエストばかりどんどんどんどん雪だるま式に増えていく中で、本当に格闘しているという状況にはありますけれども、そうした中でなんとかその先生方の思いやモチベーションをしっかりと最大限発揮していただきながら、同時に子どもたちも幸せになって、自分たちで生きていく力を持つという、この接点を見つけて行くという作業はますますこれから大変な課題になってくるとは思いますが、知恵を合わせてこれからも一緒に、教育委員会中心にやらせていただきたいと思います。本当に、一人一人かなりバラバラ、いろんなお子さんがいるので、一人一人を大切にする。本当に申し上げたように、スペックとかスキルではなくて、やはりビーイング、存在としてどうリスペクトしていくかという、そういうような教育を作っていきたいと思っております。

まだまだ読書のことも何がいいのか、正解を私たちは持ち合わせていないですし、学びも正解を持ち合わせていないですけど、試行錯誤するしかないので、全部正解でないと進めないということではなくて、試行錯誤しながら改善あるいは進化していくという、そういうようなスタンスでやっていきたいなと思いますので、これからもぜひ一緒に力合わせて進めたいと思います。よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

司会

これをもちまして、本日の会議を終了いたします。どうもありがとうございました。